



田川市中学生海外派遣事業



共に生き、 共に学んだ 日々の先に

①市役所での出発式。期待と不安を胸に、いざドイツへ! ②ベルリンの壁をはじめ戦争と対立の歴史が残るベルリン市内を見学③ベルリン市を象徴するブランデンブルク門④⑤ブレーメン市内を見学。有名な「ブレーメンの音楽隊」の像に出会えました⑥行く先々でドイツならではのグルメに舌鼓⑦荘厳なハンブルク市庁舎を背にパチリ

本市が目指す共生社会の実現。その担い手を育てるため、共生社会の先進国であるドイツに中学生14人を3期生として派遣しました。生徒たちの学びと成長の軌跡を紹介します。



共生社会の 実現へ向けて

本市は、東京2020パラリンピック競技大会の事前キャンプの誘致を機に、誰もが自分らしく生きることが出来る社会の実現を目指しています。市政の要である「田川市第6次総合計画」では、重点プロジェクトのひとつとして「共生社会の実現」を掲げ、パラスポーツの振興や心のバリアフリーの浸透など、さまざまな施策に力を入れています。

「田川市中学生海外派遣事業」もそのひとつで、国際感覚や多様性に対する感覚を身につけた共生社会実現の担い手を育成することを目的とした事業です。さまざまなものを感じて吸収することができる「中学2年生」という時期に、共生社会の先進国である「ドイツ」で学んでもらうため、市内在住の中学2年生を対象に希望者を募集。厳正な選考で選ばれた14人が3期生としてドイツに赴きました。「ドイツで学んできた先輩の話聞いて決意した」「子どもに貴重な経験をしてほしい」「親として挑戦を後押ししたい」という声が多く、回を重ねるたびに生徒や保護者の意欲や関心が高まっています。

人との関わりの中で 視野が広がった

猪位金



いわさき さな
岩崎 紗奈

共生社会の実現に取り組んでいるドイツの青年たちと意見交換。色々な人の考えを聞くことで、自分自身の視野を広げることができました。

理解しようとする 気持ちが大切

嘉穂高
附属



いまじょう かずき
今城 和己

障がいは「不可能」ではなく「サポートがあれば実現できる可能性」なのだ実感。そのために、お互いを理解しようとする気持ちが大切なのだわかりました。



私たちの思いを一冊の報告資料に
まとめました。その一部を紹介します!



⑧⑨⑩⑪オーバーシュール学校では、障がいの有無に関係なく誰もが同じ教室で授業を受けていました。授業に参加したり料理を作ったりして交流を深めることができました⑫ドイツ連邦青年協議会の若者たちと意見交換⑬⑭プレーメン州障がい者委員会では、州のインクルージョンの現状や取り組みについて学びました。



「インクルージョン」の最前線へ

一連のプログラムの中で重要なキーワードとなったものが「インクルージョン(包摂)」です。インクルージョンは「多様な人々を排除せずに全員を包み込み、個々の力をいかす」という考え方・手段のこと。インクルージョンを社会の

肌で感じました。
生徒たちは約5日間にわたりドイツに滞在。今回初となるブレーメン市を中心に、ベルリン市・ハンブルク市を巡り、それぞれの歴史や文化、共生社会に向けた取り組みなどを学びました。生徒たちは、移動中や見学中など、さまざまな場面で障がいや言語の違いなどへの配慮を発見。街中の細部から人々の心や行動までバリアフリーが浸透していることを

銘を受けていました。
「特別な空間 特別な環境」を設けるという日本の社会と大きく異なる考え方に、生徒たちは感銘を受けていました。

あらゆる場面(学校・職場・地域など)で徹底することで、共生社会という「社会の状態」が形成されていくのです。
生徒たちがインクルージョンの最前線を巡る中で、特に印象深かった経験は、オーバーシュール学校の見学や、ドイツ山岳協会でのクライミング体験。共通していることは、障がいなどを含む多様な違いを当たり前のものと捉え、誰もが同じ空間・同じ環境で学び、互いに支え合ったり意見を交わしたりしながら個々が活躍できているという点です。多様な違いに応じた配慮ができるよう



街なかで発見! バリアフリー



横断歩道で、信号が青になったことを音だけではなく「振動」で伝える仕組みを発見。空港では障がいがある人やベビーカーを押す人専用のレーンが設けられていました。

一緒に過ごすからこそわかり合える

田川東



だいのりな 台野 利奈

障がいの有無に関わらず、一緒に授業を受ける。言葉が違って一緒に生活する。そうして一緒に過ごすことで、わかり合えていくのだということを実感できました。

インクルージョンを日本に広めたい

田川東



さとうじゅんな 佐藤 絢菜

ドイツで学んだことで、自分の心が成長したことを感じました。これからはボランティア活動などに取り組んで日本にインクルージョンを広めることが私の目標です。

同世代のみんなと笑いあった日々

田川西



きむらこうし 木村 衛士

一緒に料理をしたり、クライミングに挑戦したり、おなかを抱えるくらい笑いあったり。言葉の違いや障がいの有無に関係なく、同世代のみんなと交流できて嬉しかった!

いつでも課題感を持って取り組もう

田川東



かしわぎきら 柏木 綺姫

ブレーメン市は、ドイツ国内でのインクルージョン率が1位! そんな都市でも、不便さを感じる部分もあり、課題に取り組んでいる現実を知ることができました。



⑱⑲スペシャルオリンピックスプレーメン支部では、知的障がい者のみなさんと一緒にハンドボールの試合で交流しました。



濃密な「人との関わり」

ホームステイも、異文化や言語の壁・心の壁を越えるための重要なプログラムです。今回は短い滞り期間で交流を深められるよう、大半の行程をホストファミリーと一緒に行動するという初の試みを実施。共に生活・共に学ぶという濃密な関わりは、言語だけではなく心の壁を越える大きな支えになりました。生徒たちは、研修で学んだドイツ語や英語などを駆使して思いを伝える方法を試行錯誤。しかし何より嬉しかったことは、言語を使わなく

ても、お互いに「気持ちがいいわー！伝わっている！」と感じる瞬間であったそうです。そうして心を通わせながら、本当の家族のように接してくれるホストファミリーの温かさ、細やかな配慮に感動する日々を過ごしました。一緒に食事をしながら談笑し、ゲームや観光・買い物などを楽しんで、気づけばあつという間に最終日。お別れのときは、お互いに涙を浮かべながら再会を約束し、帰国後も連絡を取り合うなど交流が続いています。



⑮⑯ドイツ山岳協会プレーメン支部では、障がいの有無に関係なく協力しながら一緒に練習しています。全身まひの人がサポートを受けながら頂上まで登る姿に感動。生徒たちもアドバイスを受けながらクライミングに挑戦しました⑰ホストファミリーとの対面式。どの家族も温かくきめ細やかにサポートしてくれて、生徒たちにとって忘れがたい経験となりました。



壁を越えた先に たくさんの学びがある

嘉穂高
附属



ながおか
りん
長岡 凛

言語や障がいなど「違い」や「壁」は乗り越えられる。その先でもっとたくさんのことを感じたり学んだりできるということを実感させられた、長くて短い8日間でした。

大切なのは 「排除」をしないこと

猪位金



とくなが
あおい
徳永 葵

「障がいがあるから全面的な手助けが必要」という自身の考えが誤っていたことを実感。偏った考えで「排除」をしないことが共生社会には必要なのだとなりました。

さまざまな立場の 人が取り組んでいた

田川西



つばき
ごうき
椿 剛毅

人生初の経験の連続でした！インクルージョンを達成できるように、さまざまな立場の人が考え、取り組んでいることを実感。戦争と平和について学ぶ機会にもなりました。

インクルージョンの 本質とは何か

田川東



たおだ
ねね
埜田 寧々

障がいの有無に関わらず全員が同じ授業を受けていて驚きました。また「排除とはインクルージョンの陰である(包摂から漏れる=排除)」という言葉が印象深かったです。



芽生えた思いを紡いでいこう

帰国した生徒たちは、学んだことや楽しかった思い出、感謝の言葉などを家族に伝え、生徒と保護者それぞれが感想文に思いをつづりました。また、事後研修で報告資料を作成し、12月20日の事後報告会に臨みました。当日は、生徒代表の徳永さん(写真②⑩)と村上さん(写真⑪)・保護者代表の今城さん(写真⑫)と台野さん(写真⑬)が感想文を発表。続いて、班ごとの研修内容の発表では、現地で撮影した写真とともにプレゼンテーションを披露しました。気づきや学び、印象深かったこと、ドイツにおける共生社会やインクルージョンの在り方などを伝え、学んだことを今後の生活や将来にいかしたいと語る生徒たちに、会場からは大きな拍手が送られました。

は、かけがえのないものです。みなさんの人間力を高める上で、とても価値のある財産になったことでしょうか」とエールを送りました。

今回の中学生海外派遣事業とおして「考え方が大きく変わった」「相手を理解し、寄り添えるようになりたい」「日本にインクルージョンを伝えたい」「今後も色々な立場の人と関わっていきたい」など、さまざまな思いが芽生えた生徒たち。現在は、それぞれの中学校で活躍しつつ、報告会などの機会をとおして学びを伝え、後進への道を開いています。

市では、今回の派遣が一過性のものではなく、共生社会の実現を後押しする取り組みとなるよう、これまでの派遣修了者を含め、共生社会に関する事業などに参加できるよう、引き続き連携を深めていきます。

生徒たちの成長した姿を目の当たりにした村上市長(写真⑭)は「共生社会を推進する一員として、田川市を引っ張っていく存在として、今後の活躍を期待してまいります」と激励。市議会の陸田議長(写真⑮)も「デジタル化やAIの普及が進む時代だからこそ、実際に現地で直接会って人と触れあうことでしか得られない経験

共有したい」と述べた。村上市長は「今回の派遣が一過性のものではなく、共生社会の実現を後押しする取り組みとなるよう、これまでの派遣修了者を含め、共生社会に関する事業などに参加できるよう、引き続き連携を深めていきます。」



将来の夢を変えたドイツでの学び

香春
思永館



なかしま おとね
中島 乙寧

将来の夢が「メイクアップアーティスト」から大きく変化。障がいのある無に関わらず「どんな人でもステージで輝けるコレクション」を主催する「ことが新たな夢になりました。」

素敵な経験と思い出が残ったから

猪位金



のむら なな
野村 奈々

ドイツで共生社会を学びながら、ホストファミリーの温かさを感じた8日間。自身が成長でき、素敵な経験と思い出が残ったからこそ、今は少し寂しさも感じています。

驚きと感動をみんなに伝えていきたい

田川西



はま けいと
浜 敬翔

ドイツの歴史的な美しい景観に感動。「障がいがある人」という認識を持つこと自体が、インクルージョンに反するという矛盾が起きてしまう事実にも驚きました。

思い込みや偏見に惑わされない心

田川西



むらかみ あんな
村上 杏奈

ドイツでは、当たり前の人々が支え合うように社会が進んでいると感じました。私も思い込みや偏見に惑わされることなく、心の壁を取り払って人と関わっていきたくです。